

平成27年 3月12日

愛知県在宅医療連携拠点推進事業成果報告会

瀬戸旭在宅医療連携拠点推進事業成果報告

平成26年1月～平成27年3月

一般社団法人 瀬戸旭医師会



お問い合わせ先

担当者 : 吉村

Mail : isikai@setoasahi.com

TAL : 0561-84-1155

FAX : 0561-84-5776

住所 : 〒489-0929 瀬戸市西長根町10番地

瀬戸旭もーやっこネットワーク : <http://p-setoasahi.nu-camcr.org/cms/>

概要(一般社団法人 瀬戸旭医師会)

医療機関数 117件(瀬戸市 64件、尾張旭市 53件)

会員数 220名

(A会員:117名、B会員:103名)

在宅診療対応可能医療機関数 40件

(瀬戸市:24件、尾張旭市:16件)

中核病院 公立陶生病院

旭労災病院

愛知医科大学病院



地域概要(瀬戸市)

○自治体名 瀬戸市

瀬戸旭医師会拠点事業の活動エリア(瀬戸市、尾張旭市)

○瀬戸市(平成26年10月1日現在)の

人口 131,455人(-520人:平成25年10月1日人口 131,975人)

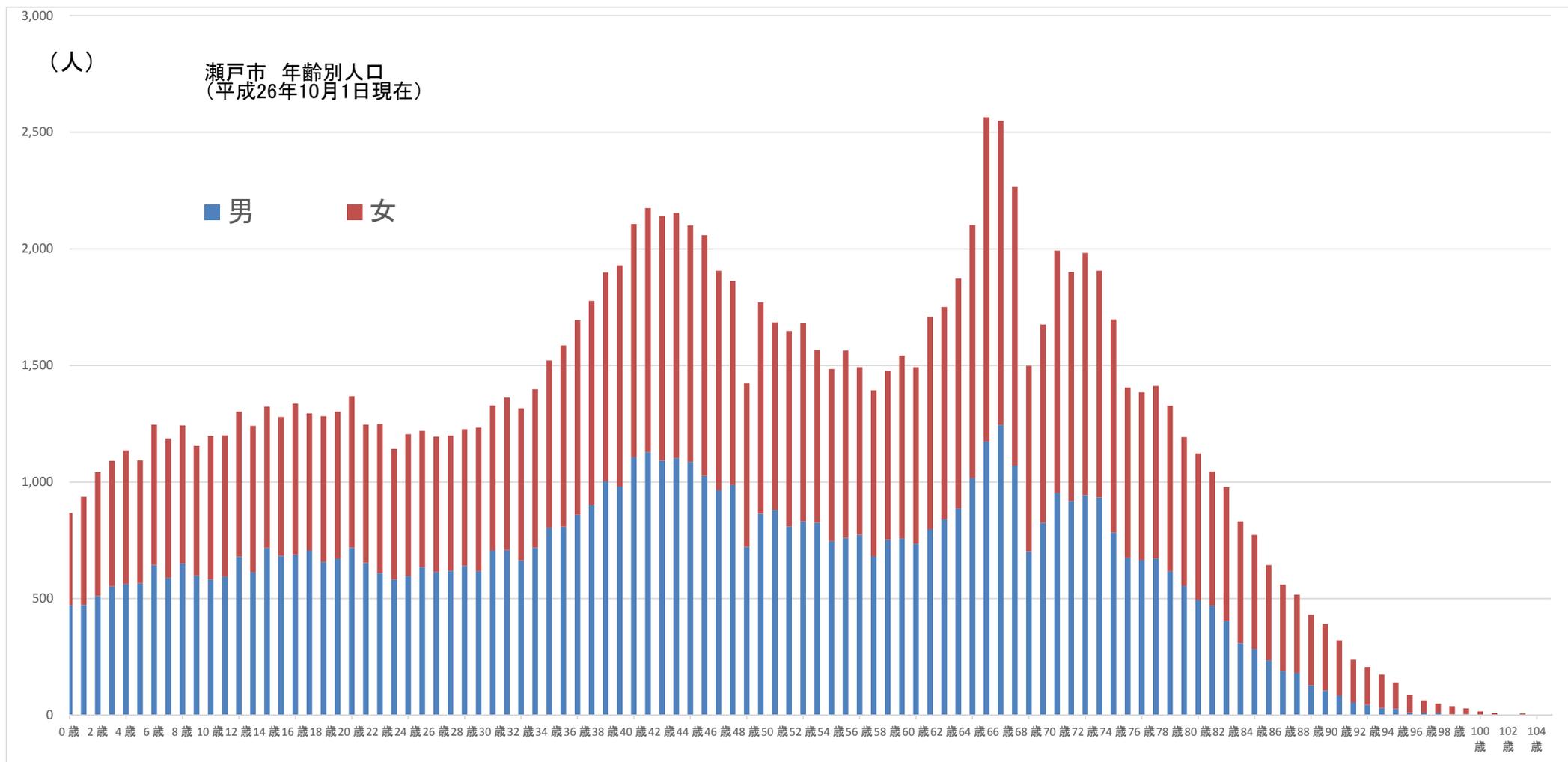
高齢化率 27.0%(+1.28%:平成25年10月1日高齢化率 25.72%)

○地域の特性

本市は濃尾平野の東、尾張丘陵の一角にあり、名古屋市の北東約20kmに位置しています。昭和4年10月1日、愛知県で5番目の市として誕生しました。やきものの原料に恵まれ、窯業が発展してきました。

しかし、団塊の世代の人々が高齢者となり4人に1人以上が高齢者という超高齢社会を迎え、平成26年の要介護等認定者は5,488人 高齢者人口(35,441人の15.48%となり、特に要支援1は平成21年に比べ2倍以上になっております。このような状況を踏まえ介護が必要になっても、可能な限りその人らしい生活を送ることができるよう、地域の人々の見守りや支援や医療・介護・福祉等の連携による切れ目のない適切なサービスが提供され、家族等も必要な家族介護のための支援サービスを受けながら、安心して暮らせる社会の実現を目指しています。

瀬戸市の人口ピラミッド



地域概要(尾張旭市)

○自治体名 尾張旭市

瀬戸旭医師会拠点事業の活動エリア(瀬戸市、尾張旭市)

○尾張旭市(平成26年12月31日現在)の

人口 82,359人(+204人:平成25年12月末人口 82,155人)

高齢化率 23.63%(+1.06%:平成25年12月末高齢化率 22.57%)

○地域の特性

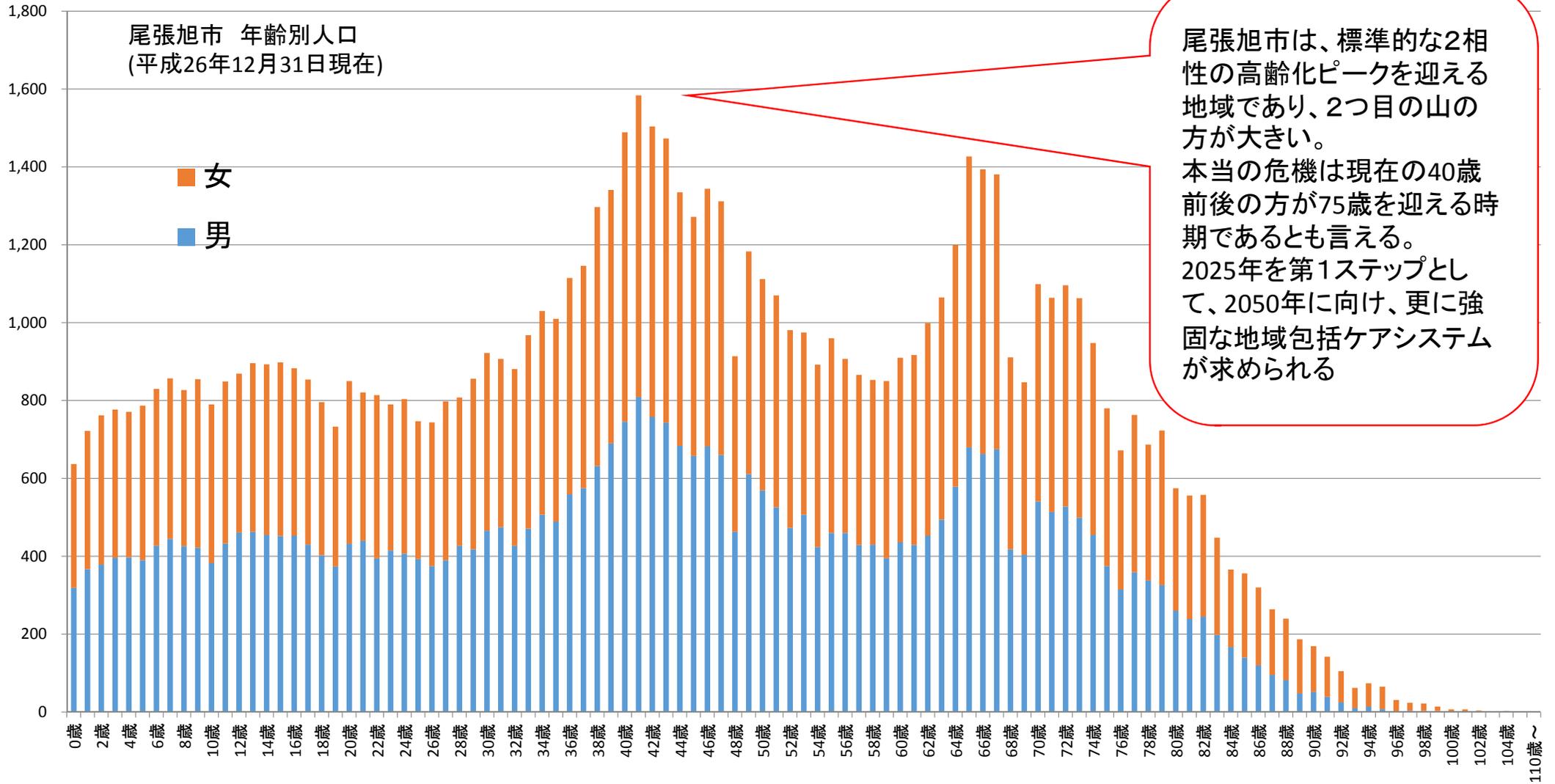
瀬戸市と尾張旭市の両市が瀬戸旭医師会の圏域であり、医師会が中心となって、瀬戸市・尾張旭市が連携し事業を進めることとした。

尾張旭市は、「健康都市」を前面にまちづくりを進めており、多くの市民が健康づくりを意識し、実践している。

本市は、昭和40年頃から宅地開発が進み、急速に人口増加した経緯があり、団塊世代及び、団塊ジュニア世代の構成率が高い。

医療機関、介護事業所が市内に点在しており、現在のところ医療・介護が受けられないような地域はないが、今後、要介護認定者数が急速に増加すると、医療・介護資源が不足するおそれもある。

尾張旭市の人口ピラミッド



尾張旭市は、標準的な2相性の高齢化ピークを迎える地域であり、2つ目の山の方が大きい。
本当の危機は現在の40歳前後の方が75歳を迎える時期であるとも言える。
2025年を第1ステップとして、2050年に向け、更に強固な地域包括ケアシステムが求められる

地域の顔の見える関係作りから開始

- 医師会長が自ら関係団体に出向き説明・協力依頼を行った(H25.9～H26.2 19回)
⇒その結果、協議会設立の際は、23の関係団体に速やかに参加して頂くことができた
- 協議会設立後も関係団体に出向き、事業説明会や電子@連絡帳説明会を20回開催し、775名に説明した
- 会議や研修会等を通じた関係構築
 - ・医師会主導で行ったことのメリット
会議一医師が先導し活動したことにより、関係団体の賛同・協力を得ることができた
 - 研修会一医師の連携を使い、声掛けにより医師の参加者を増やすことができた

事業説明会の開催



瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会の設置

- 瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会 — 医療・介護・地域・行政の全体組織
 - 実行委員会 — 在宅医療を具体化するための実行組織
 - 部会 — 実行委員会を連携推進部会・ネットワーク部会・広報部会・研修部会に分け、検討する組織
- 各部会は、それぞれ月1回程度会議を開催し、事業等を具体的に検討
 - 各部会で検討した事業案などを2か月に1回開催する実行委員会で報告
 - 重要案件は、半年に1回開催する協議会で説明し承認を得る

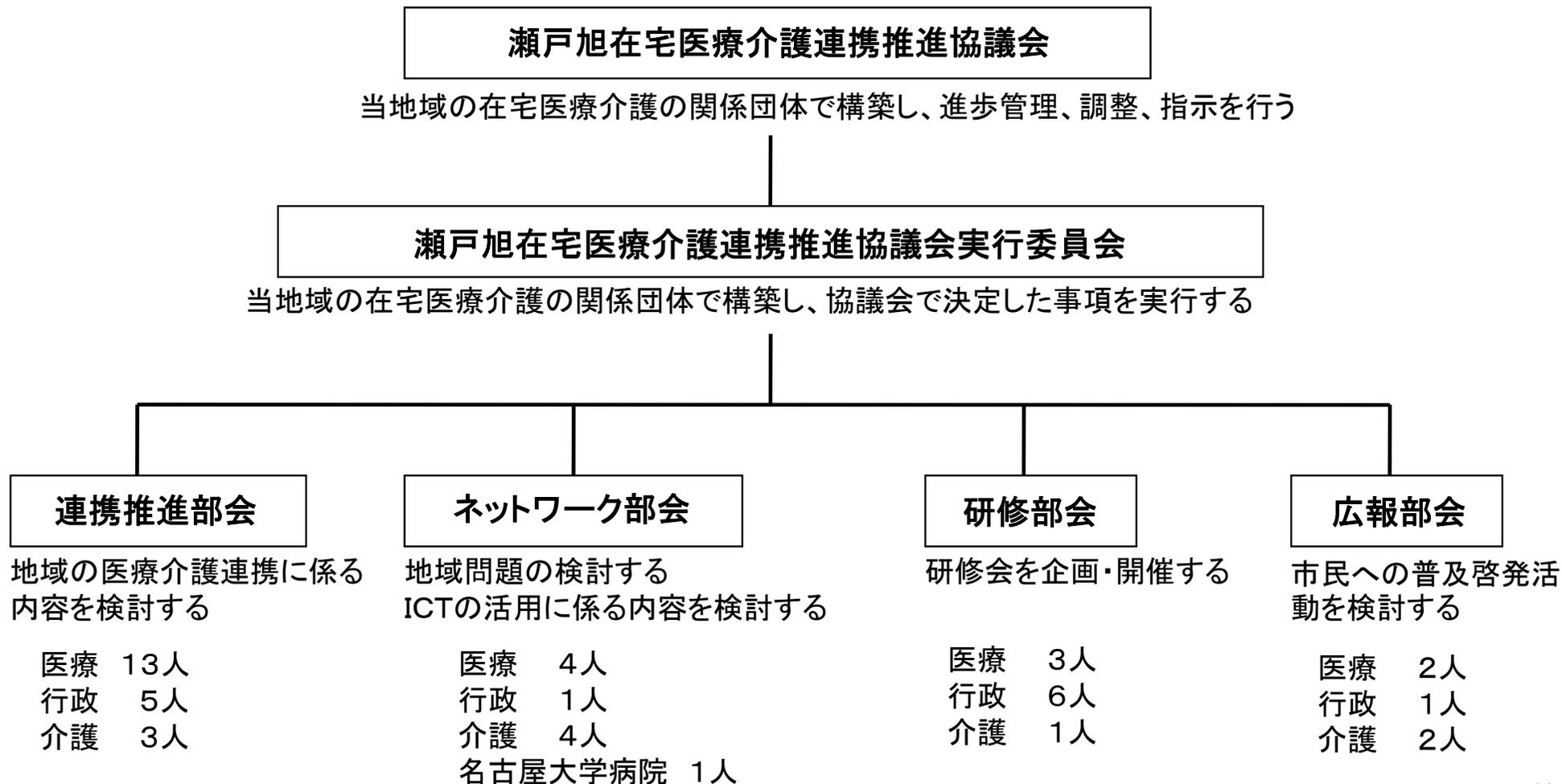
瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会 委員構成

平成27年 3月1日現在

No.	所属	氏名	役職	No.	所属	氏名	役職
1	瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会	野田 正治	会長	23	尾張旭市介護サービス事業者連絡会 介護支援専門部会	西川 緑	部会長
2	瀬戸旭医師会	黒江 幸四郎	会長				
3	瀬戸旭医師会	加藤 正仁	副会長	24	訪問看護部会	小幡 匡史	部会長
4	瀬戸旭医師会	金森 俊輔	副会長	25	訪問介護部会	山下 道晴	部会長
5	瀬戸旭医師会	鳥井 彰人	副会長	26	通所介護部会	伏木 信一	部会長
6	瀬戸歯科医師会	山中 武男	会長	27	施設介護部会	永井 和歌子	部会長
7	尾張旭市歯科医師会	山田 響介	会長	28	福祉用具部会	望月 雄太	部会長
8	瀬戸旭長久手薬剤師会	古川 信良	会長	29	瀬戸市基幹型地域包括支援センター	伊藤 竜次	
9	瀬戸旭病院会	河邊 達夫	会長	30	尾張旭市地域包括支援センター	江尻 毅	所長
10	瀬戸旭病院会	浅井 健次		31	公立陶生病院	浅野 博	循環器内科部長
11	愛知県瀬戸保健所	大野 香代子	所長	32	公立陶生病院	大野 稔人	血液内科部長
12	瀬戸市 健康福祉部	吉田 光男	部長	33	旭労災病院	阿部 彰彦	事務局長
13	尾張旭市 健康福祉部	若杉 浩二	部長	34	愛知医科大学病院 継続看護相談室	石塚 美津子	看護師長
14	瀬戸市社会福祉協議会	三宅 保正	事務局長	35	愛知医科大学病院 医療福祉相談室	村居 巖	課長
15	尾張旭市社会福祉協議会	森 修	事務局長	36	愛知県がんセンター中央病院	下山 理史	緩和ケア科医長
16	瀬戸介護事業連絡協議会	伊藤 智行	会長	37	愛知県心身障害者コロニー中央病院	伊藤 一美	外来看護師長
17	居宅介護支援部会	田嶋 五月	部会長	38	瀬戸市自治連合会	青山 光正	副会長
18	訪問看護部会	小泉 洋子	部会長	39	尾張旭市自治連合協議会	塚本 博之	会長
19	訪問介護部会	青山 ゆみ子	部会長	※	国立長寿医療研究センター 在宅連携医療部	三浦 久幸	部長
20	通所介護部会	鈴木 拓馬	部会長				
21	施設事業所部会	竹内 信二	部会長	※	名古屋大学医学部附属病院 先端医療・臨床研究支援センター	水野 正明	教授
22	福祉用具部会	加藤 綾子	部会長				

※ オブザーバー

瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会組織図



瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会等の開催



瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会(1階ホール)



瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会実行委員会(3階会議室)



連携推進部会(理事会室)



広報部会(会長室)

瀬戸旭医療介護連携推進協議会実行委員会部会名と検討内容

部会名	検討内容
連携推進部会	在宅医療従事者の負担軽減の支援、入院病床の確保及び家族の負担軽減に向けた取組の検討 <ul style="list-style-type: none"> ・主治医・副主治医制の導入の検討 ・退院時共同カンファレンス実施方法の検討 ・24時間対応の在宅医療提供体制の検討 ・在宅療養者の症状急変時における入院病床確保のための後方支援病院の確保の検討 ・レスパイトサービスの実施の検討
ネットワーク部会	地域内関係者との連絡調整 <ul style="list-style-type: none"> ・医療・介護の地域問題の検討 ・在宅医療資源リストの作成 もーやっこネットワークの管理 <ul style="list-style-type: none"> ・もーやっこネットワークを介したケアカンファレンスの内容検討 ・もーやっこネットワークにてレスパイトサービスの利用状況等を確認できる掲示板の作成 ・もーやっこネットワークのシステム向上の検討
広報部会	在宅医療・介護に関する地域住民への普及啓発活動の検討 <ul style="list-style-type: none"> ・市民フォーラムの開催内容の検討 ・在宅医療・福祉資源マップやパンフレットの作成
研修部会	在宅医療に従事する人材育成 <ul style="list-style-type: none"> ・在宅医療に従事する人材への育成・職種別育成のための研修会の検討 ・小児在宅医療に関する研修会（在宅医療従事者・レスパイトサービスに従事する看護師）の検討

多職種連携の課題抽出と解決策の検討

○多職種連携の課題抽出と解決策の検討のため、各種会議を開催した

瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会(全体会議)3回

・実行委員会 7回

・連携推進部会 9回

・ネットワーク部会 10回

・広報部会 9回

・研修部会 11回

在宅医療・介護連携推進会議(尾張旭地区) 5回

連携推進部会



① 主治医・副主治医制の導入の検討

《主治医・副主治医制の意義》

主治医が自分の専門外の疾患に対応するために専門医を副主治医として置いたり、主治医不在時に患者が急変した時など主治医に代わって往診できるような副主治医を置く

《主治医・副主治医制のメリット》

- ・主治医が専門外の場合に専門医の診察を受けたり、意見を聞いたりしやすい
- ・在宅主治医の不在時に患者の急変や看取りが必要な場合、副主治医に往診を依頼することができるため、患者も安心できまた主治医の負担も軽減される

《主治医・副主治医制の検討結果》

医師会内でも賛否両論の意見があり、半数の医師会員は副主治医不要と考えている
このため、現在、副主治医を置くかどうかは各主治医の判断に任せるものとする

- ・医師同士の関係性、上下関係等が問題(頼みにくい)になり、制度化することが難しい
- ・親しい医師間で主治医・副主治医制を行っている例がある(頼みやすい・お互い様)

○もーやっこネットワークを介して、在宅主治医と病院の元主治医を副主治医とする連携ができている

① 主治医・副主治医制の導入の検討

《主治医・副主治医制の見てきた課題》

- ・2025年問題と在宅医療の必要性の理解を高める
- ・在宅医療への理解を高める
- ・在宅医療の報酬の問題
- ・医師間の共通認識を高める

※医師間は、診療科目、歯科等に関係なくチーム医療が構築できること

② 退院時共同カンファレンス実施方法の検討

《退院時共同カンファレンスの現状》

- ・公立陶生病院では既に在宅主治医も参加しての退院時共同カンファレンスが積極的に行なわれている

実績：H25年4月～12月 31件、 H26年4月～12月 51件

- ・愛知医科大学病院・旭労災病院・愛知県がんセンターでは在宅主治医が参加しての退院時共同カンファレンス実施は、まだ少数であるが徐々に増えつつある

《今後の退院時共同カンファレンス(課題)》

- ・愛知医科大学病院・旭労災病院は今後在宅主治医が参加しての退院時共同カンファレンスを積極的に行っていく
- ・愛知県がんセンターに関しては瀬戸市・尾張旭市から距離的に遠いため在宅主治医が参加することは難しいものの、可能な場合は在宅主治医も参加して行う

③ 24時間対応の在宅医療提供体制の検討

検討結果

- ・医師会、薬剤師会、訪問看護ステーションの全会員に対してアンケート（実施意向調査）を実施
- ・患者宅への訪問や24時間対応が可能な医療機関・薬局等の資源リストを作成 ⇒在宅医療参加者の半数近くが24時間対応可能

課題

- ・市民に24時間対応体制の活用方法等の周知を図る
- ・医療関係者、介護関係者に一層の周知を図る
- ・資源リストの活用の普及を図る

④ 在宅患者の症状急変時における入院病床確保のための 後方支援病院の確保の検討

検討結果

- ・愛知医科大学病院・公立陶生病院・旭労災病院・愛知県がんセンター
においては症状急変時には速やかに入院可能な体制を確保した
また、公立陶生病院は後方支援ベッドとして5床確保できた
- ・瀬戸旭病院会においては、病院5件が緊急時入院受け入れ可能、老
人保健施設2件が緊急時入所受け入れ可能
- ・小児においては病院1件が緊急時入院受け入れ可能

課題

- ・速やかな利用ができるルール作りが必要
- ・市民および関係者への周知を図る

⑤ 在宅患者のレスパイトサービスの実施の検討

検討結果

- ・介護施設における「ショートステイ」は、事前登録等が必要となり、緊急時または医療が関わるケースは病院等のレスパイトサービスが求められる
- ・愛知医科大学病院、公立陶生病院、旭労災病院、愛知県がんセンター中央病院においてはレスパイト入院は基本的に困難
- ・瀬戸旭病院会は前向きに検討中

課題

- ・病院及び施設の機能役割分担を考慮しつつ検討していく

ネットワーク部会



瀬戸旭もーやっこネットワーク(ICT)の活用

1. 多職種チームケアの推進

電子@連絡帳を活用し、多職種連携によるチームカンファレンス(的)により、質が高く効率的なチームケアが確立できた

- ・医療、介護の多職種が、情報共有ツールとしてセキュリティを備えた電子@連絡帳による「もーやっこネットワーク」を活用した
- ・顔の見える関係の連携を基本とし、さらにICTを活用することで、常時、情報共有ができるなど、質の高いネットワークを構築した
- ・チームケアの重要性を鑑み、医師のみでなく、ケアマネ、訪問看護師によるチーム編成も可能とした

瀬戸旭もーやっこネットワーク(ICT)の活用

2. 地域のネットワーク作り

電子@連絡帳を活用し、多職種連携を充実した

○電子掲示板の運用

瀬戸旭もーやっこネットワーク(電子@連絡帳)を運用し、患者情報、在宅医療介護に係る講演会、研修会等の情報共有をしている

○電子会議の運用

瀬戸旭もーやっこネットワークにて、委員会、職種ごとにプロジェクトのページを作成し、ネットワークを使って情報共有や議論等の電子会議を行っている

瀬戸旭もーやっこネットワーク(電子@連絡帳)実績

- 登録施設数 203件
- 登録利用者数 337名
- 登録患者数 279名(チーム)



瀬戸旭もーやっこネットワーク PR用チラシ

電子@連絡帳
DENSHI-RENRAKUCHO



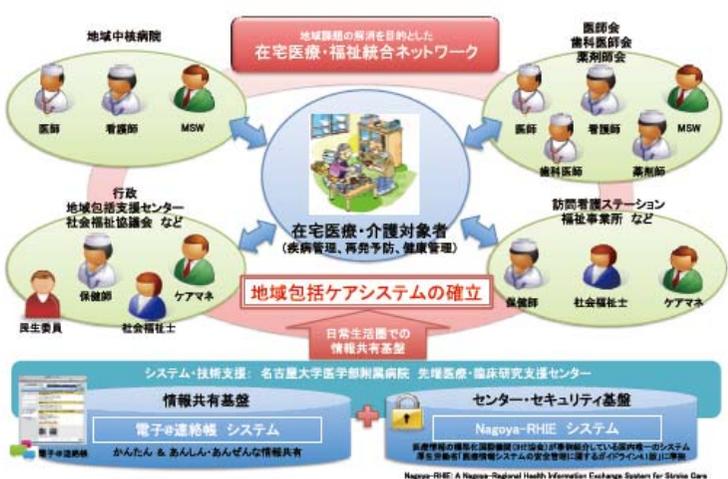
瀬戸市

在宅医療・福祉統合ネットワーク

瀬戸旭もーやっこネットワーク

高齢となった方・障害をもった方の在宅での生活を支えるために
地域中核病院・診療所・歯科医院・薬局・地域包括支援センター・
訪問看護ステーション・居宅介護支援事業所などが
スムーズな多職種連携を行うためのICTネットワークです。

在宅医療・福祉統合ネットワークの概略



システム・技術支援: 名古屋大学医学部附属病院 先端医療・臨床研究支援センター

情報共有基盤: 電子@連絡帳 システム
Nagoya-RHIE システム

詳しくは、ポータルサイトをご覧ください。

<http://p-setoasahi.nu-camcr.org/cms/>



Supported by etc

©名古屋大学医学部附属病院 先端医療・臨床研究支援センター/東海ネット医療フォーラム・NPO



電子@連絡帳
DENSHI-RENRAKUCHO



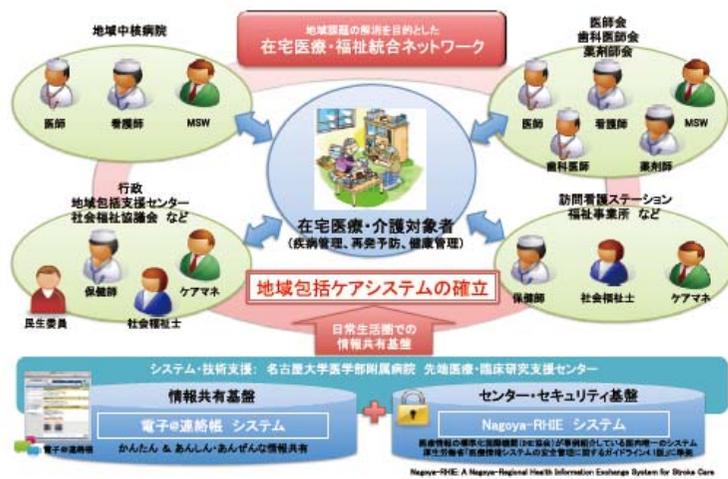
尾張旭市

在宅医療・福祉統合ネットワーク

瀬戸旭もーやっこネットワーク

高齢となった方・障害をもった方の在宅での生活を支えるために
地域中核病院・診療所・歯科医院・薬局・地域包括支援センター・
訪問看護ステーション・居宅介護支援事業所などが
スムーズな多職種連携を行うためのICTネットワークです。

在宅医療・福祉統合ネットワークの概略



システム・技術支援: 名古屋大学医学部附属病院 先端医療・臨床研究支援センター

情報共有基盤: 電子@連絡帳 システム
Nagoya-RHIE システム

詳しくは、ポータルサイトをご覧ください。

<http://p-setoasahi.nu-camcr.org/cms/>



Supported by etc

©名古屋大学医学部附属病院 先端医療・臨床研究支援センター/東海ネット医療フォーラム・NPO



瀬戸旭もーやっこネットワーク PR用ステッカー、卓上スタンド(瀬戸市)



ステッカー



卓上スタンド

瀬戸旭もーやっこネットワーク PR用ステッカー、卓上スタンド(尾張旭市)



ステッカー



卓上スタンド

広報部会



在宅医療に関する地域住民への普及啓発活動

- (1) 地域での在宅医療を浸透させるためのフォーラムや講演会等の開催
- ・ 在宅医療の市民フォーラム・講演会の実施内容を検討し、3回開催(526名)
また、地域自治組織の協力を得ながら、回覧板等を活用し周知した
市民フォーラム 平成26年 3月 8日(参加者:216名) 回覧板周知
9月27日(参加者:181名) 回覧板周知
平成27年 1月10日(参加者:129名)
- (2) 住民向けの地域の医療・福祉資源マップやパンフレット等の発行
- ・ 在宅医療資源リストを基に住民向けの地域の医療・福祉資源マップを作成し、ホームページに掲載した
 - ・ 在宅医療に関するパンフレット、ポスターを作成した



在宅医療PR用ポスター 500枚

瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会からのお知らせ

瀬戸市・尾張旭市のみなさんへ

ご存知ですか【在宅医療】

自宅などお住まいの場所で行う医療全般を在宅医療と呼びます。

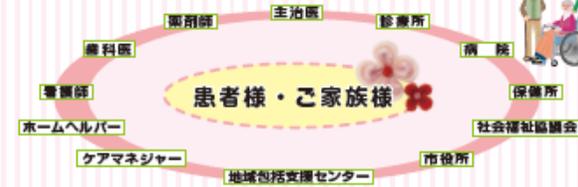
「住み慣れた自分の家で療養したい」

「できれば最期まで、思い出深い我が家で、自分らしく過ごしたい」

という思いを実現するため、すでに多くの方が「在宅医療」を利用しています。

瀬戸市・尾張旭市では、医療や介護の関係機関などが連携・協力し、安心して「在宅医療」を受けていただけるよう取り組んでいます。

みんなで支える【在宅医療・介護】



在宅医療についてのよくある質問

※対象：この中で、「在宅医療」というのは、瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会が関与している「在宅医療」のことです。

- 問1** 在宅医療は、急病すればだれでも利用できますか？
答 急病時の状態などにより入院をお勧めする場合がありますが、患者様とご家族にとって望ましい在宅医療の方法を医師などと一緒にご考えます。まずはかかりつけの医師にご相談ください。
- 問2** 在宅医療になると、家族が大変なのは？
答 在宅医療は、医療や介護の専門職がチーム体制で在宅療養を支えます。ご家族には生活上の家事負担もありますが、医療行為などは医師や看護師などの専門家が行います。急病時にとって、住み慣れた環境で家族と過ごせる安心感もあります。入院以外の選択肢として、ぜひご検討ください。
- 問3** 在宅医療は、入院と違って家族の負担に配慮できないのでは？
答 在宅医療では、ご家族になった患者を主治医の指示のもとで、看護師、薬剤師、ケアマネジャー、ホームヘルパーなど多数の専門職がチームで支えます。看護師やヘルパーなどが日々訪問を継続するとともに、急病時には、病院に優先的に入院できるよう療養を調整しています。また、瀬戸市・尾張旭市では、在宅医療・介護のチームが、「セーやネットワーク」という電子連絡システムを使い、個人情報を保護しつつ、患者様の状態をチーム内で共有し、主治医の適切な指示と各専門職による療養支援により、最善のケアができるよう努めています。

瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会の主な構成団体

瀬戸旭産科医師会、瀬戸市、尾張旭市、瀬戸市自治連合会、尾張旭市自治連合会、瀬戸市医師会、瀬戸市薬剤師会、尾張旭市医師会、瀬戸旭長久寺医師会、公立済生病院、済生会尾張旭病院、尾張旭市立病院、尾張旭市立総合医療センター中核診療、尾張旭市立総合医療センター中核診療、瀬戸市社会福祉協議会、尾張旭市社会福祉協議会、地域包括支援センター、瀬戸市介護事業協議会、尾張旭市介護サービス事業協議会

お問い合わせ先 瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会事務局（瀬戸旭医師会）
 住 所：瀬戸市西長根町10番地 電話番号：0561-84-1155

在宅医療PR用パンフレット 1,000部



よくわかる 在宅医療&介護



いつまでも住みなれた地域で
暮らしていくために



監修：鈴木隆雄／国立長寿医療研究センター研究所 所長



瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会

瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会からのお知らせ！！

瀬戸市、尾張旭市では、医療や介護の関係機関などが連携・協力し、安心して「在宅医療」を受けていただけるよう取り組んでいます。

瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会の主な構成団体

愛知県瀬戸保健所、瀬戸市、尾張旭市、瀬戸市自治連合会、尾張旭市自治連合協議会、瀬戸旭医師会、瀬戸歯科医師会、尾張旭市歯科医師会、瀬戸旭長久手薬剤師会、公立陶生病院、旭労災病院、愛知医科大学病院、愛知県がんセンター中央病院、愛知県心身障害者コロニー中央病院、瀬戸市社会福祉協議会、尾張旭市社会福祉協議会、地域包括支援センター、瀬戸介護事業連絡協議会、尾張旭市介護サービス事業者連絡会

お問い合わせ先

瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会事務局（瀬戸旭医師会）
住 所：瀬戸市西長根町10番地
電話番号：0561-84-1155 FAX：0561-84-5776
メールアドレス：isikai@setoasahi.com

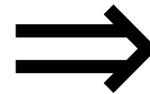


環境に配慮し、古紙配合率100%の再生紙
及び植物性インキを使用しています



禁断商標 © 東京法政出版
HE070750-019

在宅医療資源マップ



※市民公開用およびネットワーク参加者用の2種類あり

研修部会



効率的で質の高い医療提供のための多職種連携

◎在宅医療に従事する人材育成

○在宅医療に従事する人材育成として、講演会・研修会を12回開催(812名出席)

・瀬戸旭在宅医療介護連携推進協議会研修会 (3回開催)

①平成26年11月29日 85名出席

(医師 10名、歯科医師 4名、薬剤師 4名、看護師 12名、行政 6名、介護 42名、理学療法士 5名、その他 2名)

②平成27年 2月 7日 79名出席

(医師 10名、歯科医師 5名、薬剤師 6名、看護師 5名、行政 4名、介護 45名、理学療法士 2名、その他 2名)

③平成27年 3月 7日(小児) 50名出席予定

- ・在宅緩和ケアを考える会 (5回 217名出席)
- ・緩和ケア学術講演会 (1回 200名出席)
- ・在宅医療を考える会(小児) (1回 97名出席)
- ・瀬戸旭在宅医療を考える会 (1回 50名出席予定)
- ・瀬戸介護事業連絡協議会(居宅部会)研修会 (1回 34名出席)



効率的で質の高い医療提供のための多職種連携

○顔の見える関係作りの為、懇親会を3回開催(198名出席)

①平成27年2月 7日(医療とケアマネ) 71名出席

②平成27年2月21日(医療と介護) 77名出席

③平成27年3月14日(医療と看護師) 50名出席予定

○他地区開催の講演会をWEB講演会にて参加できる形での開催に向け、
愛知県医師会とテスト運用を2回実施

○瀬戸旭医師会館のホールを希望する団体へ1回貸出



行政から

行政の役割 (地域包括ケアシステムの構築)

瀬戸旭在宅医療連携拠点推進事業から見えてきた行政の役割

①在宅医療及び介護の連携によるケア体制の確立は、市民の生命と生活の『安心』の核となる。

◎特に在宅医療の推進は重要！

②生活の質の維持向上や人の尊厳を支える『暮らし』は、地域の生活土台となる。

⇒『地域住民の暮らし』を支えるのは、民生委員、自治会、ボランティア、近隣住民、友人など

それら在宅医療介護による『安心』と地域住民、組織などによる『暮らし』の双方を構築し、継続・拡大・発展させるには、

行政がまちづくりの一環として、その方向性を示し、行政が主体的かつ関係者と行政の連携、協働によりつくりあげる必要(使命、責任)があることが明確となりました。



すなわち、

『地域包括ケアシステム』の構築は、まちづくりを担う行政の使命であり、役割であり、さらに地域の医療、介護、福祉、住民などの役割の連携により実現できることを実感し、再認識しました。

瀬戸旭医師会主導の連携拠点推進事業より

<特徴>

瀬戸旭医師会は、在宅医療連携拠点推進事業を開始するにあたり、当初より地域性や将来課題、将来展望を念頭におき、「在宅医療及び介護の連携」を主体として事業を展開した

<医師会主導の効果>

- ・ 医師、歯科医師、薬剤師、病院、訪問看護師など医療関係者の賛同を得られやすい。
- ・ 介護関係者も医療機関との連携を望んでおり、医師会からの呼びかけに大半の賛同を得た。
- ・ 医師、病院、介護関係者が一体となって在宅医療の必要性や有効性などを検討することができた。
- ・ これまでの医師会の地域貢献により地域住民の信頼を得ていることから地域住民に受け入れやすい。
- ・ ICTの導入に関しても、医師会がネットワークを構築したことから高い普及率を得た。
- ・ 行政に積極的な参加を求めたことから、医療・介護・行政の連携が構築できた。
- ・ 在宅医療介護のチームによるケア(多職種によるチームケア)が確立できた。
- ・ 在宅医療に賛同し、実施する医師が得られた。(今後、さらに賛同する医師を増やす課題あり)
- ・ 今後の課題(主治医・副主治医制や24時間対応、チーム医療の必要性など)を情報共有、検討が図られた。
- ・ 在宅医療介護の将来課題の検討などを行う組織(組織化)が構築できた。



『地域包括ケアシステム』の核をつくることができた

参考
同様の展開を行政主導で実施する場合、
3~5年が必要と
想定される

在宅医療(介護)連携推進に必要なもの

- **理解** (将来を見据えての必要性等を理解する)
- **組織** (連携業務を運営し発展させるための組織)
- **情報** (収集、提供、共有)
- **ネットワーク** (顔の見えるネットワーク: 信頼関係)

+ 『**熱い思い**』